

アメリカ多文化的歴史教科書におけるマイノリティの位置づけ

—1950～1980年代—

桐谷正信 埼玉大学教育学部社会科教育講座

キーワード: 多文化教育、歴史教育、マイノリティ、合衆国史、教科書

1. 問題の所在

アメリカ合衆国（以下、アメリカと略）では、「合衆国史」という科目は、アメリカ市民として不可欠な市民的資質の育成を目的として創設され、「同化主義思想 (Assimilationism)」¹⁾による国家統合のための手段としての側面が顕著にあらわれた科目であった。その教科書の記述は、アングロサクソンの国家統合という理念を如実に反映した記述がなされていた²⁾。そのため、1960年代の「黒人」による公民権運動 (Civil Rights Movement) を契機とする民族復興運動 (エスニック・リヴァイバル) が高揚するまで、人種差別に基づく偏見を背景として、「合衆国史」の教科書にはアングロサクソン系以外の民族集団に関する記述はほとんどみられなかった。記述されていたとしても、その量は僅かであり、内容もほとんど正確に記述されることはなかったのである。森茂岳雄は、この学校が WASP (White Anglo Saxon) 文化への同化によって「アメリカ化」する機能を有していたことを以下のように述べている³⁾。

「アメリカには、世界各地からさまざまな文化をもつ人種がやって来て、アメリカで生活することにより新しい人間—すなわちアメリカ人—になるのだという『人種のるつぼ (melting pot)』説が存在していた。しかし、『人種のるつぼ』といっても、アメリカにやってきたあらゆる人種が平均化して『アメリカ人』になっていったわけではなかった。アメリカでは、最初にわたったアングロサクソン系の人々によって、イギリスの言葉である英語が共通語として認められていったのをはじめ、イギリス流の生活様式や文化が、支配的な価値となっていたのである。すなわち『新しいアメリカ人』になる『アメリカ

化する』(Americanize)-ということは、『アングロサクソン化する』(Anglicize)することを意味していた。そしてこのアングロサクソンの文化への『同化』(assimilation)としての『アメリカナイジング』こそが、伝統的にアメリカの教育の基本理念とされてきたのである。特に、非ゲルマン系である東および南ヨーロッパからの『新移民』の増大した19世紀末から20世紀初頭には、移民の『アメリカ化』が教育の基本理念として明確に認識され、学校がその機関として機能していったのである。」

1980年代以降にアメリカで隆盛した多文化教育 (Multicultural Education) は、従来の WASP 的文化価値に支配されてきた学校教育が、生徒たちに民族的ステレオタイプを植え付け、民族間の差別や偏見を助長してきたという批判にたち、各民族間で、その文化的多様性を相互に理解し、協調・共存していくことがアメリカの民主主義社会をより豊かなものとしていくという多文化主義 (Multiculturalism) に基づいて構想されたものである。現在では、多文化教育は、人種・民族だけでなく、性的志向、障害、社会的・経済的階層などの人々の属性・経験を含め、合衆国憲法、権利章典、独立宣言などに示された自由 (Liberty)、正義 (Justice)、平等 (Equality)、公正 (equity) といった人権概念を基盤として、多様な文化的背景を持つ生徒が、平等な教育的経験ができるように学校やその他の教育全体を改革する教育思想・理論・運動・実践をさす⁴⁾。多文化教育が、単一民族学習 (single ethnic studies) にその源流にあるため、人種的・民族的多様性に注目されるが、現在では、マイノリティとは民族的マイノリティだけではなく、女性といった性的マイノリティや高齢者や子どもといった年齢集団的マイノリティ、低所得労働者

などの社会的マイノリティも含めた概念として考えられている。ここでいうマイノリティとは、「何らかの属性的要因（文化的・身体的等の特徴）を理由として否定的に差異化され、社会的・政治的・経済的に弱い地位に置かれ、本人たちもそのことを意識している社会構成員」⁵である。

歴史教育は、自己の所属する社会のあり様に対する認識を規定し、自己のアイデンティティのあり方を規定する。多様な文化的背景をもつ生徒にとって、自らの文化的アイデンティティが保障される歴史教科書が開発される必要があると考える。アメリカの歴史教育においては、多文化教育のための取り組みが活発になってきているとはいえ、いまだ、「アングロ文化同調主義 (Anglo-Conformity)」⁶は厳然として強い影響力を持っている。歴史的に成立し、増大し、固定化されてきた人種的・民族的偏見や対立の除去・軽減のために、より一層の多文化教育の深化・拡充が必要である。歴史教育は、その中核的教科の一つとなる教科である。そのため、歴史教育における多文化教育の展開が期待されているのであるアメリカの多文化教育学者であるバンクス(Banks, J.A.)は、多文化教育における歴史教科書の重要性について、以下のよう⁷にいう。

「教科書は、それは社会科カリキュラムの中核をなすものであるが、人種的態度に影響可能なため、教科書が子どもたちの人種的態度や、自己認識、価値の方向付けを明確化するように、彼らを援助する方向へと貢献する視点によって教科書の内容を注意深く評価することは必要不可欠なことになってきている。」

社会科教育、特に歴史教育において、教科書は児童・生徒の歴史認識を発達させる上での資料として中心的役割を果たす教材であり、児童・生徒の人種的・文化的態度に大きな影響を与えるものである。ゆえに、その教科書の記述内容を分析し、評価することは重要である。それゆえ、本論文では、諸マイノリティ集団に関する教科書記述が変化し始めた1960年代から、多文化教育が隆盛した1980年代のアメリカにおける中等教育用「合衆国史」教科書に関する研究の分析を通して、「合衆国史」教科書におけるマイノリティに関する記述の変化と問題点を明らかにする。

1960年代の公民権運動を契機として、「合衆国史」教科書における「黒人」⁸と「白人」エスニックに関する記述は、量的に増大し質的に変化しはじめた。同時に、歴史教科書の内容に対する社会的な関心も高まり、その社会的な圧力によって、教科書執筆者や出版社は、アメリカ社会の発展における女性や第三世界の人びと、アメリカ先住民の役割を無視することが困難になったのである。

2. 「合衆国史」教科書におけるエスニック・マイノリティの記述

2-1「合衆国史」教科における「黒人」の描写の変化

1985年にガルシア (Jesus, G.) とゴーベル (Goebel, J.) は、1956年から1979年までにカリフォルニア州で用いられていた中等学校の「合衆国史」教科書から選択した5冊の教科書と、1981年から1984年までの教科書から選択した11冊の教科書における「黒人」に関する記述を比較研究している⁹。ガルシアとゴーベルの「黒人」の悲惨な経験に関する文章やイラストの量的増大と質的变化に焦点をあてる視点は、アメリカの歴史教育における多文化教育の展開をみる上で有効である。

ガルシアとゴーベルによるこの比較研究の目的は以下の二つであった。

- ・11冊の選択された「合衆国史」の教科書を「黒人」の描写に関して検証すること。
- ・これらの11冊の現代の教科書における「黒人」の描写と、1956-1979年の時期に出版された5冊の中等学校の「合衆国史」の教科書における「黒人」の描写を比較すること。

この目的は、「黒人」について記述している内容が量的に増加しているかどうか検証することと、疑問はあるにしても、「黒人」に関する描写が質的に高まっているかどうか示唆することであった¹⁰。

ガルシアとゴーベルは、過去の教科書として、1956年から1979年までの期間、カリフォルニア州によって学校で使用するために採用された中等学校用の「合衆国史」の教科書の中から、以下の5冊の教科書を選択した¹¹。

1. Hartman, Gertrud, (1956) *America : Land of Freedom*, Massachusetts : D.C. Heath and Company.
2. Casner, Mabel B. and Ralph, H Gabriel, (1963) *Story of the American Nation*, New York, Harcourt, Brace and World, .
3. Caughey John W., John, H Franklin, and Ernest, May, (1967) *Land of the Free A History of the United States*, Pasadena, California, Franklin Publications.
4. Chapin, June R et al, (1973) *Quest for Liberty—Investigating United States History*, Menlo Park, California, Addison-Wesley.
5. Okun, Mitchel, and Stephen H. Bronz, (1975) *The Challenged America*, New York : Holt Rinehart and Winston, Inc. .
6. Bragdon, Henry W. and Samuel, P. McCutchen, (1981) *History of a Free People*, New York, Macmillan Publishing Co.
7. Buggey, L oanne, (1982) *America! America!* Glenview, Illinois, Scott, Foresman and Company.
8. Davidson, James W. and Mafk, H. Lytle, (1984) *The United States: A History of Republic*, Englewood Cliffs, New Jersey, Prenticehall Inc.
9. Drewry, Henry N. et al., (1984.) *America Is*, Columbus, Ohio, Charles E. Merrill Publishing Co.
10. Jordon, Winthrop, et al., (1982) *The Americans*, Chicago, Science Research Associates, Inc.
11. Sobel, Robert, et al., (1982) *The Challenge of Freedom*, River Forest, Illinois, Laid law Brothers Publishing.
12. Smith, Lew, (1982) *The American Dream*, Glenview, Illinois, Scott, Foresman and Company.
13. Todd, Lewis Paul, (1982) *Rise of the American Nation*, New York, Harcourt Brace Jovanovich.
14. VerStegg, Clarence L. (1982) *American Spirit, A History of the United States*, Chicago, Follet Publishing Company.

また、1981年から1984年までの期間、全米で広く用いられていた中等学校の「合衆国史」の教科書の中から、以下の三つの基準によって11冊の教科書を選択した¹²。

- (1) 二大社会科教育学術誌である *Social Education* と *Social Studies* において、1984年前後に教科書の広告をだしている出版社の教科書。
 - (2) 1982年のマサチューセッツ州ボストンで開催された NCSS (National Council for Social Studies) の年次大会において教科書を展示した出版社の教科書。
 - (3) テキサスA&M大学の教育学部社会科研究室所蔵のものから選択された教科書。
- 選択された教科書は以下の11冊である¹³。

1. Berkin, Carol and Leonard, Wood, (1983) *Land of Promise*, Glenview, Illinois, Scott, Foresman and Company.
2. Bowes, Johe et al., (1981) *Discovering Our Past : A History of the United States*, Chicago, Science Research Associates,

ガルシアとゴーベルは、1956年から1979年まで教科書を、専門審査委員であるブラウナー (Brauner R.) の「ブラウナー質問」 (Brauner Questions) ¹⁴に基づいて、「黒人」の悲惨な体験を記述している文章やイラストを目次と索引からその量と質について評価した。また、1981年から1984年までの教科書に関しては、より正確に「黒人」に関する記述の内容を明らかにするために、オリジナルの質問を一部改訂し、それに基づいて評価した。

表1 : 「合衆国史」教科書における「黒人」記述に関するブラウナー質問

- | |
|---|
| <p>教科書執筆者は、どのようにそしてどの程度、「黒人」に関して記述しているか？</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. なぜ「黒人」がアメリカに移住してきたのか (1619年まで) 記述しているか？ 2. いつ「黒人」がアメリカに移住し、「白人」系アメリカ人と最初に接触したのか (1700年まで) 記述しているか？ 3. 「黒人」と「白人」系アメリカ人との間の相互の影響 (1701年-1864年) を記述しているか？ 4. 「黒人」集団と結びつけて考えられる問題と功績に対して、歴史的な視点 (1865年-1953年) を与えているか？ 5. 「黒人」を正確に記述しているか (1964年-現在まで) *6. 初期のアメリカ人の「黒人」観に光をあてているか？ 7. 「白人」系アメリカ人の体験と「黒人」の悲惨な体験との相違に注意しているか？ ‡8. 「黒人」の人物と団体を記述しているか？ 9. 「黒人」の写真やイラストが含まれているか？ |
|---|

*がついた質問は、1981年から1984年までの教科書の分析においては用いられなかった質問である。

‡がついた質問は、1966年から1979年までの教科書の分析においては用いられなかった質問である。

その結果は、1960年代以前に出版された「合衆国史」の教科書において、「黒人」はほとんど正面から描写されていないことを示している。1960年代に至って、「黒人」の悲惨な体験を記述した文章の量は顕著に増大している。しかし、その内容は、「黒人」の民族集団を描写してはいなかった。例えば、「黒人」集団に関する記述は、典型的に、奴隷制度 (slavery) と南北戦争後の南部の再統合 (reconstruction)、1973年から1976年の出版においては1960年代の公民権運動に焦点化されている。また、5冊のうち3冊が「黒人」がアメリカに強制的に連れてこられた時のことには言及せず、または、「黒人」の悲惨な体験と「白人」の体験を区別している。加えて、執筆者たちは、「黒人」の民族集団に関連の社会的な問題と功績に対して歴史的視点を提示すること、もしくは「黒人」と「白人」系アメリカ人との主な相互作用を記述することにも失敗した。

「黒人」を記述している内容は、抽象的、すなわち人間の次元が欠落していた。例えば、最初の2冊の教科書における奴隷制度下と南北戦争後の南部の再統合期に関する記述においては、「黒人」に関する記述よりも、その事件に関する記述の方が多かった。他の3冊の教科書においては、奴隷制度下と南北戦争後の南部の再統合期の「黒人」に関する記述は、「黒人」の搾取に焦点化され、「黒人」の文化的な体験には焦点化されなかった。5冊すべての教科書においては、制度上の人種差別と「黒人」の機会を制限してきた社会の実態についての議論は、ほとんどもしくはまったくなされていない。この結果から、彼らは、「1966年から1976年までに出版された教科書に関しては、『黒人』の悲惨な体験の扱いはバランスが取れておらず、ステレオタイプに近いものであった」¹⁵と分析している。

1981年から1984年までの教科書に関しては、「黒人」の悲惨な体験を記述する文章の総量は過去の教科書に比べ明らかに増大を示している。対象とされた集団を記述する文章の総量の教科書の総ページ数に対する割合は、11冊の教科書すべてにおいてほぼ一律であった。1981年から1984年までの「合衆国史」の教科書は、「黒

人」の悲惨な体験に1頁あたり1±1.3をあてている。扱っているトピックについても、広範な範囲に渡る記述がなされている。

しかしながら、民族集団としての扱いは、1956年から1979年までの教科書とそれほど変化してはいない。執筆者たちは、二つの主な歴史的時期 (1701-1864年、1864-1953年) に焦点化した記述をしている。1956年から1979年までの教科書と同様に、執筆者たちは、その他のトピックよりも多く、奴隷制度と南北戦争後の南部の再統合期に関する記述をしている。また、1960年の公民権運動は、かなり詳細に記述されている。しかし、このことは、他の問題や出来事が扱われていないということを示唆するものではない。その教科書に記述されているトピックは、例えば、植民地期のアメリカにおける自由「黒人」(Free Blacks)、「黒人」の奴隷制への最初の抵抗、システムの中での「黒人」の労働、あらゆる歴史的時代における「黒人」の業績などが挙げられる。しかしながら、これらのトピックの多くに関する詳細な情報は、記述されていないのである。

「黒人」の悲惨な体験を描いた絵画や写真は、1981年から1984年までの教科書においてはかなり顕著に増加している。その上、状況と役割の多様性において「黒人」を描くための努力は、明らかである。具体的には、教科書は「黒人」を、奴隷、議員、スポーツの有名人、社会的政治的活動家、ブルーカラー労働者、管理職など、典型的なアメリカ市民として描こうとしている。

上記の結果から、彼らは、1981年から1984年までの教科書に関して、「黒人」の悲惨な体験を記述する文章や絵画、写真の量が、1960年代以降増大したとしても、「黒人」の民族集団に関する正確で、バランスの取れた描写には、まだ、改善の余地があると分析している¹⁶。

2-2 「合衆国史」教科書における「白人エスニック」の描写

アメリカの同化主義による拡大期において、同化の対象とされたのは、主に「新移民」と呼ばれる東・南ヨーロッパからの「白人」移民であった。「アングロ文化同調主義」に基づき、「新移民」に、WASPの言語と文

化に「同化」することを要求した。その同化思想主義の背後には、「白人」・非「白人」を峻別する人種差別に加えて、同じ「白人」でも、プロテスタントである西・北欧系の「白人」が、カトリックの多い東・南欧系の「白人」よりも優れているという序列意識が存在していたのである¹⁷。そのようなアイルランド系と東・南ヨーロッパ系の子孫は、一般に、イギリス系やドイツ系とは区別して「白人エスニック」(White Ethnic)と呼ばれている。

ガルシアは1986年に、「白人エスニック」(アイルランド系、ユダヤ系、ポーランド系アメリカ人)の中等学校の「合衆国史」教科書における記述の量と質について分析している¹⁸。ガルシアは、教科書の記述内容から、以下のような三つの時期区分を設定している¹⁹。

- ①民族学習期 (ethnic studies period, 1956-1975)
- ②多文化期 (multicultural period, 1977-1978)
- ③現代 (contemporary period, 1984-1986)

そして、この三つの時期区分に対応して、以下の三点を検証することを目的とした²⁰。

- (1) 少数民族への関心が高い優先性が持たれていた以前と持たれていた間に、市販された教科書に「白人エスニック」に関する内容が記載されていたかどうか。(1956年-1975年)
- (2) 多文化教育が少数民族と「白人エスニック」集団の経験に焦点を当てるものとみなされていた1970年代後半に、「白人エスニック」に関する内容が増加したかどうか。(1977年-1978年)
- (3) 少数民族問題と多文化教育のための支持が、教育家たちから以前ほどは重要視されていなかった時期に、「白人エスニック」に関する内容が継続して教科書に記載されていたかどうか。(1984年-1986年)

ガルシアは、時期ごとに教科書を5冊ずつ選択し、分析を行った。

民族学習期の教科書は、カルフォルニア州の学校で用いられていた次の教科書である。²¹

1. Hartman, Gertrud, (1956) *America: Land of Freedom*, Massachusetts: D. C. Heath and Company.
2. Casner, Mabel B. and Ralph, H Gabriel, (1963) *Story of the American Nation*, New York, Harcourt, Brace and World, .

3. Caughey John W., John, H Franklin, and Ernest, May, (1967) *Land of the Free A History of the United States*, Pasadena, California, Franklin Publications.

4. Chapin, June R. et al, (1973) *Quest for Liberty- Investigating United States History*, Menlo Park, California, Addison-Wesley.

5. Okun, Mitchel, and Stephen H. Bronz, (1975) *The Challenged America*, New York: Holt Rinehart and Winston, Inc..

多文化教育期の教科書は、1978年にシカゴで開かれたNCSSの五大湖地域委員会で提示された次の教科書である。²²

1. Binda, D. B., et al., (1977) *We the People - A History of the United States*, Lexington, Mass., D.C. Hesth and Company.

2. Eibling, H. H., et al., (1977) *Two Centuries of Progress - United States History*, River Forest, Ill., Ladidlaw Brothers.

3. Smith, L. (1977) *The American Dream*, Glenview, Ill., Scot, Foresman.

4. Friedel, F. and H. N. Grewry, (1978) *America Is*, Columbus, Charles E. Merrill, .

5. Risjord, N. K. and T. L. Haywood, (1978) *People and our Country*, New York, Holt, Rinehart and Winston.

現代期の教科書は、1985年に評価された次の教科書である²³。

1. Schwartz, S. and J. R. O'Connor, (1984) *Exploring Our Nation's History*, New York, Globe Book.

2. Conlin, J. (1985) *A History of the United States, Our Land, our Time*, San Diego, Calif. Coronado Publishers.

3. Risjord, N. K. (1985) *A History of the United States*, Englewood Cliffs, N.J., Printice - Hall.

4. Wood, L. C. et al., (1985) *America: Its people and Values*, Orland, Fla., Harcourt Brace, Javanovich.

5. Linden, G. M. et al., (1986) *Legacy of Freedom: A History of the United States*, River Forest Ill., Landlaw Brothers.

ガルシアは、上記の三時期の教科書をブラウナーの「ブラウナー質問」²⁴に基づいて分析した。そして、各教科書からデータを引き出すために、以下のこれらの手続きを用いた。

・それぞれの民族集団に関連する用語や、「移民」(immigrant) もしくは「移住」(immigration) という単語が用いられているか、索引を調べ、それぞれの民族集団の見出し項目を確認する。

・それぞれの見出し項目と共に、特にそれらの民族集団に関して記述しているすべての文章や句の頁数を年代順に表にまとめた²⁵。

表2：「合衆国史」教科書における「白人」記述に関するブラウナー質問

<p>教科書執筆者は、どのようにそしてどの程度、「白人」に関して記述しているか？</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. なぜ「白人」エスニック集団がアメリカに移住してきたのか記述しているか？ 2. いつ「白人」エスニック集団がアメリカに移住し、アメリカ人（「白人」／非「白人」）と接触し始めたのか記述しているか？ 3. 「白人」系アメリカ人と「白人」エスニック集団との間の主な相互の影響を記述しているか？ 4. それぞれの「白人」エスニック集団を正確に紹介しているか（ステレオタイプではなく） 5. 「白人」エスニック集団に関する初期のアメリカ人（「白人」／非「白人」）の認識を補強しているか？ 6. 一般に「白人」エスニック集団と結びつけて考えられる問題と功績に対して歴史的な視点を与えているか？ 7. それぞれの「白人」エスニック集団間の経験の相違点を指摘しているか？
--

その結果、三時期区分の「白人」エスニックに関する文章の量は、①民族学習期では309文章、②多文化教育期では446文章、③現代期では258文章となった。

①民族学習期 (ethnic studies period, 1956年-1975年)

民族学習期の教科書において、「それぞれの「白人」エスニック集団を正確に紹介しているか」、「「白人」エスニック集団と結びつけて考えられる問題と功績に対して歴史的な視点を与えているか」(ブラウナー質問4と6)については、若干の記述がみられる。しかし、「いつ、そしてなぜ、「白人」エスニックがアメリカに移住してきたのか」(ブラウナー質問1と2)、「「白人」エスニックと北・西ヨーロッパ系アメリカ人の間の主な相互作用について記述されているか」(ブラウナー質問3)、「各エスニック集団間の経験の相違点を指摘しているか」(ブラウナー質問7)については、ほとんど記述されていない。

②多文化期 (multicultural period, 1977-1978)

多文化教育期の教科書において、「それぞれの「白人」エスニック集団を正確に紹介しているか」(ブラウナー質問4)については、明らかに大幅な増加を示している。しかし、「「白人」エスニック集団と結びつけて考えられる問題と功績に対して歴史的な視点を与えているか」(ブラウナー質問6)、「いつ、そしてなぜ、「白人」エスニックがアメリカに移住してきたのか」(ブラウナー質問1と2)についての記述量の増加は、ほんのわずかである。「白人」エスニックに関する記述量は、全体

として増加したが、質的には、民族学習期の記述とそれほど変化していない。

③現代期 (contemporary period, 1984-1986)

現代期の教科書において、その記述は、「いつ、そしてなぜ、「白人」エスニックがアメリカに移住してきたのか」(ブラウナー質問1と2)、『「白人」エスニック集団と結びつけて考えられる問題と功績に対して歴史的な視点を与えているか」(ブラウナー質問4と6)に焦点が当てられ、民族学習期、多文化教育期と同様、『「白人」エスニックと北・西ヨーロッパ系アメリカ人の間の主な相互作用について記述されているか」(ブラウナー質問3)、『「白人」エスニック集団に関する初期のアメリカ人の認識を補強しているか」(ブラウナー質問5)「各エスニック集団間の経験の相違点を指摘しているか」(ブラウナー質問7)については、ほとんど焦点は当てられていない。56%以上の文章がブラウナー質問4について書かれたものであった。

ガルシアは、「白人エスニック」に関する記述の量は、②多文化教育期が一番多いが、これは、この時期の「白人エスニック」集団の民族運動の高揚と、「白人エスニック」集団からの出版界への圧力による結果であるとしている。そして、その内容も、記述量は大幅に増大しているが、正確で、深い理解を伴った記述という側面では、①民族学習期と同様であり、①②③のすべての時期において、「白人」エスニックと西・北欧系の「白人」(established American)との相互作用や、各民族集団の経験の区別に関しては不十分であると分析する。

そして、中等学校の「合衆国史」教科書における「白人エスニック」の記述は、「人種のるつぼ(Melting Pot)」理論²⁹⁾に基づいて記述されており、もし、「合衆国史」の教師が、文化多元的な歴史解釈を生徒に提示しようとするならば、創造的な才能を必要とするであろうと、結論づけている²⁷⁾。

3. 「合衆国史」教科書におけるアメリカ先住民、チカーノ、女性の描写

The Council in *Interracial Book for Children* (以下、The Councilと略。)は、アメリカの「合衆国史」教科書におけるアメリカ先住民とチカーノと女性に関する記述内容について分析している。1977年にThe Councilは、「合衆国史」の教科書から13冊の教科書を選択し、それらの教科書における女生と第三世界の人びとに関する記述の具体的内容についての評価を行っている。そこで、本節では、The Councilが1977年に出した報告書、*Stereotypes, Distortions, and Omissions in U.S. History Textbooks*をとりあげる。The Councilは、「合衆国史」教科書における記述の問題点について以下のようにしている²⁸⁾。

「最近まで、ほとんどの合衆国史の教科書は、実質的に「白人」だけの、そして男性だけの社会像を提示してきた。第三世界の人びとや女性に関する記述の著しい省略は一般的なものであり、そこでは、除外がまさに行われていたのである。そして、それらの人びとやそれらの人びとの集団の活動に関する言及は、皮相的であり、しばしば意味のないものであった。」

The Councilは、「白人」・男性優位の歴史教育を批判し、1960年代までステレオタイプで、歪曲され、省略されてきた第三世界の人びとや女性に焦点を当てている。そして、主要な出版社が出版している「合衆国史」教科書における以下の6グループの取り扱いについて検証している²⁹⁾。

- ① 女性
- ② アフリカ系アメリカ人
- ③ アジア系アメリカ人
- ④ チカーノ (メキシコ系アメリカ人)

- ⑤ アメリカ先住民
- ⑥ プエル・トリコ人

そして、上記の6グループを対象として以下の6事項を提示することを目標としている³⁰⁾。

1. 比較的新しい教科書の検討から得られる所見と洞察。
2. 最近の教科書における一般的な人種差別主義者と性差別主義者のステレオタイプと歪曲に対する手引き。
3. 比較的新しい教科書においていまだ欠落している重要な情報。
4. 過去と現在の事象を選択的にみるための方法。
5. 全ての歴史教科書を評価するための数量化の指標。
6. 継続発展的な研究のための文献目録。

The Councilは、主な出版社から、1970年以後に出版された「合衆国史」教科書を集め、その中から以下の13冊の教科書を選択した³¹⁾。

1. *America: Its People and Values*, Harcourt Brace Jovanovich, 1975.
2. *The American Experience*, Addison-Wesley, 1975.
3. *American History for Today*, Ginnand Company, 1970.
4. *The Challenge of America*, Holt, Rinehart and Winston, 1973.
5. *The Free and The Brave*, Rand McNally and Company, 1967.
6. *The Free People: The United States in the Twentieth Century*, Macmillan Company, 1970.
7. *History the American People*, McDougal, Littell and Company, 1975.
8. *The Impact of Our Past*, McGraw-Hill, 1972.
9. *In Search of America*, Ginnand Company, 1975.
10. *Man in America*, Silver Burdett, 1974.
11. *The Pageant of American History*, Allyn and Bacon, 1975.
12. *Rise of The American Nation*, Harcourt Brace Jovanovich, 1972.
13. *The Shaping of America*, Holt, Rinehart and Winston, 1972.

※5. の*The Free and The Brave*だけは1970年以前に出版された教科書である。

The Councilは、上記の①～⑥の対象に対して、各章の末尾に「人種差別と性差別に関する教科書の記述評価するために読者が利用する」³²⁾チェックリストを提示している。そのチェックリストの項目が教科書の記述の評価の基準となり、報告書ではそれらの項目に従って、教科書記述の評価が行われている。ここでは、上記の6対象から、①女性、④チカーノ、⑤アメリカ先住民をとりあげる。チカーノは、人種的には、450年前のアメリカ先住民とヨーロッパ人との混血に、奴隷としてアメリカ大陸に連れてこられたアフリカ人の血が

コロンブスによって誤って当てられた呼び方であり、本来、非常に多末で複雑な先住民の社会と文化を、「インディアン」という誤った呼び方で、一括りにしてしまったのである。ある先住民の集団は、彼ら独自の土地、言語、慣習、衣服と、他の集団のそれらとを明確に区別をしているのである。しかし、西部劇の映画や

教科書などのよって、「インディアン」は、開拓者の「頭皮の剥ぎ取り」、貨物列車の「襲撃」、「荒野」での生活などといった、誤ったそして固定的なイメージで捉えられてきたのである。The Councilは章末に以下のアメリカ先住民のためのチェックリストを提示している。³⁴

表4：「アメリカ先住民」のためのチェックリスト

書名 出版社	出版年	学年	不正 正確な 情報 -2	情報 なし -1	特定 時期 の省 略 0	制限 され た情 報 +1	十分 な情 報 +2
26の点数化のための基準を提示した。最も高い評価は+52点。最も低い評価は-52点である。この教科書の点数は 点。							
1.アメリカ先住民は、もともと北アメリカに住んでいた人びとである。							
2.コロンブス到達以前の先住民社会は、非常に多様性と複雑性を反映していた。							
3.「発見」の神話は、露骨なヨーロッパ中心主義である。							
4.少なくとも1000～2000万人の先住民が、後に成立したアメリカ合衆国に住んでいる。							
5.「先進文化」は、自民族中心主義であり、ヨーロッパの征服を説明したり、正当化しない。							
6.戦争と暴力は、先住民国家の特性ではない。							
7.アメリカ先住民の技術と知識は、彼らが独自で到達したものである。							
8.キリスト教の布教活動は、ヨーロッパの征服の不可欠の一部であった。							
9.先住民諸国家は、彼ら独自の戦略的目的のために、ヨーロッパ諸国と協定を結んだ。							
10.先住民の土地におけるヨーロッパと植民地の経済的利害の衝突が合衆国の独立のきっかけとなった。							
11.先住民国家は、彼らの共同体と土地を守るために、侵略者と戦った。							
12.アメリカ先住民にとって土地は特別な重要性を持っており、合衆国との衝突の中心的問題であった。							
13.アメリカ先住民を「友好的」か「非友好的」のどちらかに分類することはヨーロッパ中心主義である。							
14.アメリカ先住民への合衆国の政策は、合衆国社会における多くの政治的・経済的要素を反映している。							
15.教科書の用語は、ヨーロッパ中心主義であり、アメリカ先住民の存在と視点を無視している。							
16.法的な協定の締結が、先住民国家と合衆国の間の関係の中心である。							
17.1881年のドーズ法 (Dawes Act) によって、結果としてアメリカ先住民の土地の残りの3/4が失われた。							
18.1924年の市民権法 (The Citizenship Act) は、慈善的な法案ではなかった。							
19.1934年の再組織法 (The Reorganization act) は、アメリカ先住民の疎外と弱体化を強めた。							
20.1950年代の管理停止政策によって、より多くの土地が喪失され、諸協定が無効とされた。							
21.BAI (インディアン局) は、100万人の業務を管理するには、不正で能率の悪い官僚制であった。							
22.抑圧的な境遇は、アメリカ先住民の適正規模のより低い人口増加に帰着した。							
23.指定居留地 (Reservation) は、アメリカ先住民の逆説を現している。							
24.協定随、独立、民族自決、土地の回復は、アメリカ先住民の主要な目標である。							
25.土地を守るための努力は、今日も続けられている。							
26.アメリカ先住民の過去の悲慘な経験と現在の現実との間には関連がある。							
計							
教科書の最終点数							

The Councilは、教科書におけるアメリカ先住民に関する記述を評価するために、上記のようなチェックリ

ストで26の基準を提示している。その26の基準に従って、教科書記述を評価している。

「合衆国史」教科書において、しばしば、女性はステレオタイプに描写され、女性の悲惨な経験は歪曲され、女性が我々の人口の半分を占めているという事実さえ省略されてきたのである。その原因は複雑であり、単に性的偏見だけではない。歴史家は、年代学的に重要な戦争や条約、探検、選挙といった伝統的な男性中心の歴史を見る視点によって、過去の事象を検証するように訓練されてきている。そのような見方においては、女性は自動的に除外されてしまうのである。他の原因として、人間一般を表わす代名詞として、男性代

名詞 (he) が一般的に用いられていることがあげられる。このことによって、教科書において記述されている事象に女性が男性と同じように関わっていることを削除してしまうのである。また、読者に、女性の歴史的な経験は、男性の歴史的経験と同じであるかのように受け取られてしまうのである。そこには、男性とは異なった、女性の独自の歴史的経験や視点が欠落しているのである。The Councilは、章末に以下のような女性のためのチェックリストを提示している³⁵。

表5：「女性」のためのチェックリスト

書名 出版社	出版年	学年	不正 確な 情報 -2	情 報 なし -1	特 定 時 期 の 省 略 0	制 限 さ れ た 情 報 +1	十 分 な 情 報 +2
35の点数化のための基準を提示した。最も高い評価は+70点。 最も低い評価は-70点である。この教科書の点数は 点。							
1.アメリカ先住民の女性は、彼女たち自身の社会では、かなりの力をふるっていた。							
2.先住民の女性は、多くの白人の観察者が記述する「こつこつと働きすぎる人」ではなかった。							
3.ポカホンタス (Pocahontas) やサカジャウエア (Sagoyewew) はアメリカ先住民女性の典型ではなかった。							
4.初期のヨーロッパからの植民者には、多くの女性が含まれていた。							
5.教科書で用いられている英語は、植民地時代と現在における女性の人権の欠落をあいまいにしている。							
6.アン・ハッチンソン (An Hutchinson) や他の女性は、宗教的指導者に関する男性の独占に挑戦した。							
7.女性は、その労働と存在が経済に有効であったため、ロンドンの投資家によって連れてこられた。							
8.年季奉行人が裕福な植民者によって安価な労働者として輸入されたため、女性は二重に抑圧された。							
9.奴隷にされなかった女性のほとんどは当時のヨーロッパ人の女性よりもかなりの程度、経済的・社会的自由を享受した。							
10.女性が、独立革命の鍵となる役割を果たした。							
11.独立革命後、女性の選挙権と自由は奪われた。							
12.普通の女性の生活と裕福な女仕の生活の間の差異もまた、形成された。							
13.産業化時代の最も初期から、女性労働者は特別な搾取を受けた。							
14.女性の教育を受ける権利は、すべての人権の拡大と同様に、断固とした努力によって到達された。							
15.女性の改革者は、合衆国社会において大きな変化を成し遂げた。							
16.多くの奴隷制度廃止の主張者たちが、その中で女性活動家が有力であったため、女性の権利擁護の主張者でもあった。							
17.1848年のセネカ・フォールズの女性の意見大会は、選挙権運動の歴史的な発端を意味する。							
18.女性には法的な権利がなかったため、アルコール中毒は男性の場合よりも大きな問題となった。							
19.奴隷にされた黒人女性は、性的・人種的抑圧と戦った。							
20.黒人女性は、抑圧的な法律に対しても抵抗した。							
21.女性は、南北戦争において鍵となる役割を果たした。							
22.女性は、西部への「定住」に欠くことができない存在であった。							
23.ワイオミング州や他の西部諸州は、州のためになる時のみ女性の権利を認めた。							
24.1800年代末から1900年代初頭にかけて、黒人女性の多くは能動的な社会改革者であった。							
25.女性の社会改革者は、都市生活の諸側面に重大な衝撃を与えた。							
26.1900年代初頭において、女性労働者は特に搾取を受けた。彼女たちの境遇に対する労働組合の関心が欠如していたにもかかわらず、いくつかの団体が組織された。							

る視点としても、非常に示唆に富んでいると思われる。この報告書で提示している各民族集団の記述内容を評価し、点数化するためのチェックリストも、歴史教科書を分析するために有効であると思われる。特に、記述の量的分析のためではなく、質的分析のためのチェックリストである点は、アメリカ以外の教科書を分析する際の有効なモデルになると思われる。

しかし、提示されているチェックリストの項目の設定基準については、明らかにされていない。チェックリストの項目は、各マイノリティ集団毎に異なっており、その歴史的事件・人名を項目の中でとりあげた理由については、明確に定義されていない。

多文化教育において、歴史教育は、人種的・民族的偏見と差別の軽減・除去をめざす上で、中核となる教科である。その教科書の記述内容を評価する方法の確立は急務である。しかしながら、日本においてそのための方法論は、まだ十分に研究されているとはいえない。上記のような研究をモデルとして、多文化教育のための教科書分析の方法論確立と精緻化が、今後の課題であろう。

【註】

¹ 江淵一公「多民族社会の発展と多文化教育—アメリカの場合をモデルとして—」、小林哲也・江淵一公編『多文化教育の比較研究—教育における文化的同化と多様化—』（九州大学出版会、1985年）11頁。

² Banks, J. A. (1969). Content Analysis of the Black Americans in Textbook. *The Social Education*, vol. 33, no. 8, p. 954. Garcia, J. and Goebel, J. (1985). A Comparative Study of the Portrayal of Black Americans in Selected U. S. History Textbooks. *The Negro Education Review*, vol. 3-4. Garcia, J and Tanner, D. E. (1985). The Portrayal of Black Americans in U. S. History Textbooks. *The Social Studies*, vol. 76, No. 5. 大森正、森茂岳雄「アメリカの社会科カリキュラムにおける文化多元主義の展開」『社会科教育研究』No. 51, 1984年、2-3頁。

³ 森茂岳雄『社会科教育における人類学的認識の意義—アメリカの人類学カリキュラムの分析を通して—』筑波大学大学院教育学研究科 前期課程論文、1979年、51-52頁。

⁴ Banks, J. A. (2004). Multicultural Education : Historical Development, Dimensions, and Practice. in Banks, J. A. eds. *Handbook of Research on Multicultural Education*. 2nd edition. Jossey-Bass.

P.3. Banks, J. A. and Banks, C. A. M. (2005). *Multicultural Education : Issues and Perspectives*. 5th edition. Jhon Wiley & Sons. Inc. p.3. Sleeter, C. E. and Grant, C. A. (1999). *Making Choices for Multicultural Education : Five Approaches to Race, Class, and Gender*. 3rd edition. Merrill. p. vii-viii.

⁵ 宮島喬・梶田孝道「マイノリティをめぐる包摂と排除の現在」宮島喬・梶田孝道編『国際社会④ マイノリティと社会構造』東京大学出版会、2002年、1頁。

⁶ 江淵、前掲書、11頁。

⁷ James, A. Banks, (1969) Content Analysis of the Black Americans in Textbook, *Social Education*, vol. 33, no. 8, p. 954.

⁸ 現在、「黒人」という呼称は、差別用語にあたると主張する意見もでてきており、正式な呼称として用いるのは、不適切である。しかし、「白人」に対応させて「黒人」という用語が歴史的に用いられてきており、また、アメリカ人研究者の中でも、“Black”や“Black American”を使う研究者もあり、統一した見解はまだ出ていない。ゆえに、本論文では、歴史的用語として用いる場合は、「黒人」を用いることにする。「白人」も同様に用いることにする。

⁹ Garcia, J. and J. Goebel, (1985) A Comparative Study of the Portrayal of Black Americans in Selected U. S. History Textbooks, *The Negro Education Review*, vol. 3-4.

¹⁰ *ibid*、pp. 118-119.

¹¹ *ibid*、p. 121.

¹² *ibid*、p. 122.

¹³ *ibid*、p. 122.

¹⁴ *ibid*、pp. 123-124.

¹⁵ *ibid*、p. 125.

¹⁶ *ibid*、p. 126.

¹⁷ 江淵、前掲書、12頁。

¹⁸ Jesus, G.、*op. cit.*

¹⁹ *ibid*、p. 169.

²⁰ *ibid*、p. 169.

²¹ *ibid*、p. 171.

²² *ibid*

²³ *ibid*

- ²⁴ ibid
- ²⁵ ibid、 p.172.
- ²⁶ Crèvecoeur, J. H. St John de. (1997). *Letters from an American Farmer*. Oxford University Press. (初版は1782年。) (斎藤真他編・秋山健他訳『アメリカ農夫の手紙』研究社、1982年、75-76頁。) ゴードンによれば、アメリカの同化の理論を、「アングロ・コンフォーミティ」「メルティングポット」「文化的多元主義」の三つに分類している。Gordon, M. M. (1964). *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*. Oxford University Press. pp. 85-86. (倉田和四生・山本剛郎訳『アメリカンライフにおける同化理論の諸相—人種・宗教および出身国の役割—』晃洋書房、2000年、82頁。)
- ²⁷ ibid、 pp.172-174.
- ²⁸ The Council on Interracial Books for Children, *Stereotypes, Distortions and Omissions in U.S. History Textbooks*, New York, Council on Interracial Books of Children, 1977、 p.11.
- ²⁹ ibid、 p.12
- ³⁰ ibid
- ³¹ ibid、 p.7.
- ³² ibid、 p.12
- ³³ ibid、 p.65.
- ³⁴ ibid、 pp.84-85.
- ³⁵ ibid、 pp.122-123.

(2010年9月30日提出)

(2010年10月15日受理)